

改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・ 妥当性の検討^{1~3)}

勝 谷 紀 子

東京都立大学大学院人文科学研究科⁴⁾

本研究では、2つの調査によって改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度（以下、再確認傾向尺度）の信頼性と妥当性を検討した。研究1では、301名の学生を対象とした予備調査の結果をもとに大学生123名を対象に再確認傾向尺度、抑うつ、自尊心を含む質問紙に回答させた。その結果、再確認傾向尺度は、2つの因子（再確認願望、再確認行動）から構成されていること、比較的高い値の信頼性係数があることが示された。また、本尺度は抑うつ傾向と正の相関、自尊心と負の相関があることが示された。研究2では、大学生397名を対象に調査を行い、本尺度は他の学生サンプルでも同様の因子構造がみられること、不安、拒否回避欲求、他者からの評価の知覚とも関連があることがみだされた。最後に、再確認傾向にもとづいた重要他者との相互作用が精神的健康に及ぼす影響について、今後の研究の方向性について述べた。

キーワード：重要他者に対する再確認傾向、信頼性、妥当性、抑うつ、自尊心

問 題

日常生活において、自分にとって重要な存在であり、その人との関わりが自己概念や感情に大きな影響を及ぼす人がいる。このような重要他者と

の社会的相互作用は、精神的健康に大きな影響を及ぼす。本研究は、重要他者との関わり方の1つである、重要他者に対する再確認傾向（reassurance-seeking）を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。

重要他者に対する再確認傾向 重要他者に対する再確認傾向（e.g., Joiner & Metalsky, 2001；Joiner, Metalsky, Katz & Beach, 1999；以下、再確認傾向）とは、“自分は愛されているのか、自分は価値がある存在なのかについて、すでに確認をしたかどうかにかかわらず、重要他者に対して過度に、しつこく確認を求めてしまう比較的安定した傾向”と定義されている。これは、重要他者とのこれまでの相互作用の積み重ねで形成された、重要他者に対する比較的安定した動機づけや行動のパターンである。たとえば、自分のことをどれだけ気にかけてくれるのか気になって何度も尋ねる、相手が自分を好きなのかをたびたび確かめようとする、などがこれにあたる。具体的な方略と

- 1) 本論文の作成・調査の実施にあたりご指導下さいました、東京都立大学人文学部沼崎誠先生にお礼申し上げます。また、調査の計画段階では埼玉工業大学の友田貴子先生に、論文の作成において広島国際大学長谷川孝治先生にご助言いただきました。データ整理の際には、東京都立大学の武田美亜さん、古館有希子さんにお世話になりました。記してお礼申し上げます。
- 2) 本研究の一部は、2002年日本心理学会大会第66回大会で発表した。
- 3) なお、先行研究ではReassurance-seekingに“安心探し”という訳語をあてている研究もある。本論文では、“重要他者に対して過度に繰り返し確認を求めたがる”という意味合いを強調するために、“重要他者に対する再確認傾向”という訳語をあてた。
- 4) 現所属：日本学術振興会・日本大学

しては、言語的方略（例：悩みをうち明ける、弱音を吐く）、非言語的方略（例：慰めてもらうために落ち込んだところをみせる、相手を試す）、認知的方略（例：相手の言動についてあれこれ考える）が考えられる。

この再確認傾向にもとづいた相互作用が重要他者との間で積み重なると、重要他者との関係悪化、抑うつが発生や持続につながりやすいとされている。ストレスフルなライフイベントの経験（Joiner & Schmidt, 1998）などをきっかけに重要他者に確認を求める行動を繰り返した結果、重要他者から拒否的反応を受ける、関係への満足感が低下するなどの関係悪化につながる事態が生じ、それによって抑うつが発生する。また、もともと抑うつ的な場合にも、再確認傾向にもとづく相互作用を繰り返すことで重要他者から拒否的反応を招き、さらに抑うつが悪化してしまう、というプロセスが指摘されている。

まず、再確認傾向が重要他者との関係悪化につながりやすいことについて、Joiner, Alfano & Metalsky (1992) は、大学寮の学生を対象に2回の質問紙調査によるパネル調査を行っている。その結果、もともと抑うつのかつ自尊心が低い男子大学生の場合、再確認傾向が高いほど同性のルームメイトから拒否的反応を受けていることが明らかになった。

また、再確認傾向は抑うつが発生や維持とも関連する。抑うつが発生から回復の過程を対人的要因から説明する抑うつへの対人的アプローチ（e.g., Joiner & Coyne, 1999）では、抑うつにつながる不適応的な相互作用パターンの要因として不安定なアタッチメント（Bowlby, 1980）、ネガティブな自己概念の確証（Swann, Wenzlaff, Krull & Pelham, 1992）などが指摘されている。再確認傾向も、抑うつが発生（Joiner, Katz & Lew, 1999）や持続（Katz, Beach & Joiner, 1998）、抑うつへの感染現象（Contagious depression：抑うつ者に関わると、関わった方まで抑うつにおちいる現象；Joiner,

1994）につながると指摘されている。

Joiner & Metalsky (2001) では、抑うつへの脆弱性としての再確認傾向の役割を6つの実験・調査で検討している。その結果、再確認傾向は抑うつかどうかを判断するのに特に有効であり、抑うつ症状を発生させた人は再確認傾向がもともと高い傾向にあること、再確認傾向の程度によってその後抑うつになるかどうかを予測できることを示した。日本でも、再確認傾向と抑うつとの関連（勝谷, 2001；長谷川・浦・前田, 2001）が示されている。

さらに、再確認傾向は精神的健康に関わる他の指標とも関連している。たとえば、自尊心の低さ（勝谷, 2001；Katz et al., 1998）や反映的評価（他者から肯定的にみられているという評価）の変化（Hasegawa & Ura, 2001）との関連が明らかになっている。

このように、再確認傾向は対人関係の悪化、抑うつが発生・持続など精神的健康に関わるさまざまな問題との関連が示されているのである。

既存の再確認傾向尺度の問題 上記の欧米での研究および勝谷（2001）で使われた再確認傾向を測定する尺度は、“自分のことを心から気づかっているのかどうか、親しい人に確かめて怒らせたことはありますか？”などの4項目からなる7件法尺度である（以下、4項目尺度）。この尺度は、高い信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性が報告されてはいる（Joiner et al., 1992; Joiner & Metalsky, 2001；勝谷, 2001）。しかし、英語版と日本語版の両方の尺度において、①再確認傾向の概念的定義に対応した測定を必ずしもしていない、②言語的行動を尋ねる項目に限られている、③再確認傾向が極端に高い人しか高得点をとれない項目内容である、④教示文での“重要他者”の表現に偏りがある、という問題があった。以下、これらの問題を順に論じる。

まず、①の概念的定義の問題については、4項目尺度は1因子からなる尺度だという主張がある

(Joiner & Metalsky, 2001). 一方, 4項目尺度は再確認傾向を測定しているよりは, 重要他者がどう思っているかを繰り返し確かめたがるか, 確かめたことで重要他者を困らせたかなど複数の要素を混合して測定しているとの指摘がある (Benazon & Coyne, 1999).

4項目尺度の項目をみると, 重要他者に繰り返し確認を求める行動(以下, 再確認行動)をして対人関係上のネガティブな結果を経験したかも含めて尋ねる項目が半分を占め, 再確認傾向の定義で重要な要素である再確認行動だけを尋ねる項目が少ない. そのため, 4項目尺度では再確認傾向そのものと対人関係上のネガティブな結果の経験を分離せずに測定している問題があった. その上, “自分の存在価値に関わる側面について重要他者に確認したい願望(以下, 再確認願望)”を尋ねる項目は存在しなかった. 再確認願望とは, 重要他者が自分の価値や能力, 存在を認めているのか, 大事に思っているか, 気にかけているかなどを確かめようとする動機づけである. 再確認行動としてとられるさまざまな方略は, 自己高揚動機, 親和動機など他の動機から起こることもある. そのため, 再確認行動だけを尋ねるのでは他の動機にもとづいた行動と区別できず, 再確認傾向を適切に測定できない. そこで, 対人関係上のネガティブな結果を経験したかを項目に含めず, 動機づけである再確認願望も加えて再確認行動を尋ねる尺度にした方が, より再確認傾向の概念的定義に即した測定ができると考えた.

これらの議論から, 本研究では, 再確認傾向には“再確認願望”と“再確認行動”の2つの要素があり, “再確認行動による対人関係上のネガティブな結果の経験”は含まれない, と従来の概念的定義を改訂し, 2つの要素だけを含んだ尺度を新たに作成した. また, 4項目尺度で1因子となったのは, 項目数が4項目と少ないことによる可能性もあるため, 新たに作成する尺度では全体の項目数を増やした.

第2に, ②の項目内容の問題について, 4項目尺度では, “～をたずねることがよくありますか?”と言語的行動を主に尋ねていた. しかし, 非言語的行動で重要他者に自分の存在価値に関わる側面を確かめることもあるのではないだろうか. たとえば, 落ち込んでいるところをみせるなど自分の弱い側面を示して他者からの援助を得るという哀願 (Jones & Pittman, 1982) など, 非言語的方略でも再確認行動をとることがあるだろう. 4項目尺度では, こうした再確認行動を測り切れておらず再確認傾向を概念的に狭く扱っている. そこで, 今回の尺度では, 非言語的行動による再確認行動に対応する項目も含めた. 勝谷 (2001) では, 欧米での先行研究で一貫してみられた抑うつ・自尊心との中程度の相関がみられなかった. これは, 日本では欧米よりも非言語的行動で再確認行動を示すことが多いために相関が明確にならなかったのかもしれない.

第3に, 4項目尺度は再確認傾向が極端に高い人しか高得点がとれないような項目内容である可能性があった. 実際に, 日本語版の4項目尺度では, 最低得点(4点)をとる者が最も多く, 得点が高くなるほど頻度が少なくなるという偏った分布となっていた (勝谷, 2001). また, 英語版と日本語版の両方で, 4～28点の得点範囲に対して平均値が8～10点と低めの値になっていた. これは, 4項目尺度ではどの項目でもかなり強い表現で尋ねていたためだと考える. つまり, 各項目で“～することがよくありますか?”と尋ねているのに対し, “よくある”～“全くない”の7件法で回答させていたのである. そのため, 4項目尺度では再確認傾向が極端に高い者しか高得点にならなかった可能性がある. 再確認傾向は, 非臨床サンプルにおいて精神的健康に関わるさまざまな問題との関連が指摘されているため, 通常の日常生活を送ることができる非臨床サンプルを対象とした場合には, 概念的には比較的正規分布になるような構成概念であると考えられる. そのため, 非臨床

サンプルを対象に精神的健康や対人関係への影響を説明・予測しようとする場合、再確認傾向がある程度高いにもかかわらず尺度得点はあまり高くないなど4項目尺度がうまく機能せず、再確認傾向の影響を適切に検討できない可能性がある。

そこで、今回の尺度では、回答形式を頻度のニュアンスを含まない“まったくあてはまらない”～“非常によくあてはまる”に修正した。また、概念的定義の“過度に、しつこく確認を求めてしまう”という部分は、回答形式ではなく項目内容に反映させた。

最後に、④の“重要他者”の表現の問題については、英語版、日本語版の両尺度で重要他者を“親しい人”と表現していた。重要他者には、好意、愛着、親しみなどポジティブな感情を向けているポジティブ重要他者だけでなく、ネガティブな感情を向けているがその存在は重要であるネガティブ重要他者や、ポジティブ、ネガティブ両方の感情を向けているアンビバレントな重要他者もいる(Chen & Andersen, 1999)。“親しい人”という表現では、こうした重要他者が含まれず、重要他者を限定してとらえてしまう。冒頭の重要他者の定義から考えれば、重要他者に向けている感情を必ずしも限定する必要はない。また、回答者が重要他者ではなく単なる親しい人を想定した可能性もある。そこで本研究では、重要他者のことを“親しい人”とせず、本研究で定義する重要他者を回答者が想定できる教示文に変えた。

本研究の目的 研究1では、改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度(以下、再確認傾向尺度)を日本人向けに新たに作成し、その信頼性と妥当性を検討する。また、尺度の因子的妥当性を検討するため、概念的定義に対応する因子(再確認願望、再確認行動)が確認できるかを調べた。

また、再確認傾向との関連が予想される個人差変数との相関を調べ、再確認傾向尺度の収束的証拠についての検討をする。再確認傾向の定義や先行研究の結果(e.g., Katz et al., 1998)から考える

と、再確認行動によるネガティブな経験および抑うつとは正の相関、自尊心とは負の相関があると予測する。

研究2では異なるサンプルを対象に尺度の因子構造と個人差変数との関連を再検討し、尺度の再検査信頼性も検討した。

研究1

方法

(1) 尺度の作成と検討

まず、再確認傾向の定義にもとづき、“再確認願望”と“再確認行動”に対応する項目を作成した。項目を作成する際は、黙従傾向による回答のバイアスを防ぐために逆転項目を含めた。作成した12項目について、心理学を専門とする研究者と大学院生が概念的定義との対応、表現の不自然さをチェックした後、T大学の学生301名を対象に本調査と同じ7件法での予備調査を行った。各項目の平均値、標準偏差、項目間の相関係数を求め、2因子を想定した確認的因子分析を行って因子負荷量の低い項目を削除し(例「あなたのことを気づかってくれたとしても、自分のことを心から思ってそうしたのだろうか」と疑ってしまうことがある)、さらに項目を再作成(例「自分のことを気にかけていて欲しい」)して、調整を行った。これらの項目について、心理学を専門とする研究者および上記とは別の大学院生が概念的定義との対応と表現の不自然さのチェックを行い、新たに19項目を採用した。

(2) 尺度の信頼性と妥当性の検討

調査協力者 H大学の学生123名(男性85名、女性37名、不明1名;平均年齢18.83歳)。

手続き 講義時間中に質問紙を配布して、その場で回答を依頼した。

質問紙の構成 質問紙には、以下の尺度が含まれていた。①再確認傾向尺度:本尺度は“再確認願望”と“再確認行動”の2つの下位尺度から構成されており、全19項目のうち6項目が逆転項

目だった。“日常生活の中で、好きか嫌いかはともかくとして、とても重要な存在の人たちがいるのではないのでしょうか。以下の文章を読み、あなたにとって重要な人たちとの関係について、現在の自分に最もよくあてはまる数字に○をつけて下さい。4は『どちらでもない』として、回答して下さい。”との教示の後に、各項目について“まったくあてはまらない(1)”から“非常によくあてはまる(7)”の7件法で評定させた⁵⁾。②再確認行動の結果：重要他者に再確認行動をとって拒否される、嫌がられるなどのネガティブな経験をしたかについて、“まったくあてはまらない(1)”から“非常によくあてはまる(7)”の7件法で尋ねた。再確認傾向尺度を作成するための予備調査の際にあわせて作成した6項目尺度である(例：「自分のことを本当に受け入れてくれるかどうかを確かめて、相手との関係が悪くなったことがある」)。③自尊心尺度：日本語版ローゼンバーグ自尊心尺度(星野, 1970)を用いた。自尊心を測定する10項目からなる5件法の尺度である。④抑うつ尺度：自己評価式抑うつ尺度(Self rating depression scale, SDS；福田・小林, 1973)を用いた。回答時の抑うつ状態を測定する20項目からなる5件法の尺度である。⑤4項目版再確認傾向尺度：4項目版の再確認傾向尺度(勝谷, 2001)。Joinerらによる再確認傾向尺度を日本語に翻訳したもので、4項目からなる7件法の尺度である。

結果と考察

項目分析 各項目得点について、下位尺度ごとに全項目の合計得点の上位50%と下位50%で対応のないt検定を行ったところ、すべての項目で両群に差がみられた。また、下位尺度ごとに、各項目を1つずつ抜いた α 係数を求めた。再確認行動下位尺度において、その項目を取り除くことで

α 係数の上がった1項目を削除した。

尺度の内的構造の検討 再確認傾向尺度の因子的妥当性を検討するため、残された18項目について確認的因子分析を行った(Table 1)。ここで想定しているモデル(モデル2)は、再確認願望、再確認行動という相関のある2因子から構成されるというものである。その他に、すべての項目が再確認傾向という1因子を構成しているモデル(モデル1)も検討した。Table 1の適合度指標をみると、当初から想定していたモデル2の適合度がモデル1の適合度よりわずかながら高いことが示されたので、このモデルを採用して変数選択をおこなうことにした。

さらに、a) 下位尺度の項目数が同じになること、b) 各下位尺度には逆転項目を必ず残すことを選択基準に、対応する因子から各項目へのパス係数が相対的に低い項目を削除した。その結果、再確認傾向尺度の項目として12項目を採用し、以下この版を用いて検討することとした(Table 2)。この12項目に対し、相関のある2因子を想定した確認的因子分析を再び行ったところ、適合度指標は1因子モデルより高い値となった(Figure 1, Table 1)。

信頼性の検討 再確認傾向尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を求めたところ、再確認願望下位尺度では.80、再確認行動下位尺度では.75となった。なお、確認的因子分析の結果では1因子モデルの適合度も低くなかったため、尺度全体での α 係数もあわせて求めたところ.86となった。よって、本尺度は比較的高い値の信頼性係数が得られた。

得点分布 尺度の得点分布は、4項目尺度よりも正規分布に近くなっていた(尖度 = -.31, 歪度 = -.30)。

他の構成概念との関連 再確認傾向との関連が予想される他の構成概念との相関を調べるため、再確認傾向尺度と抑うつ、自尊心、再確認行動の結果、4項目尺度との相関係数を求めた。その結

5) このような教示文にしたのは、特定の重要他者ではなく、重要他者一般に対する傾向を尋ねているためである。

Table 1 各モデルの適合度指標

モデル	GFI	AGFI	RMSEA	χ^2	AIC	CFI	df
モデル1： 1因子を仮定	.885 (.815)	.834 (.766)	.077 (.091)	93.362 (272.409)	141.362 (344.409)	.910 (.797)	54 135
モデル2： 2因子を仮定	.893 (.819)	.842 (.768)	.072 (.090)	86.823 (267.508)	136.823 (341.508)	.922 (.803)	53 134
モデル1： 1因子を仮定	.883	.831	.101	272.573	320.573	.877	54
モデル2： 2因子を仮定	.909	.867	.087	212.820	262.820	.910	53

注. 上段は研究1のデータで、カッコ内は18項目による数値。下段は研究2のデータである。GFI=Goodness of Fit Index, AGFI=Adjusted Goodness of Fit Index, RMSEA=Root Mean Square Error of Approximation, AIC= 赤池情報量基準, CFI=Comparative Fit Index.

Table 2 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の項目およびその平均値と標準偏差

	項目	平均値	標準偏差
願望	1 自分を受け入れてくれるのかどうか確かめたい。	5.11	1.43
願望	2 能力や性格など、自分のよいところを認めてくれるのかどうか確かめたい。	4.85	1.33
願望	3 たとえ能力や性格などに悪いところがあっても、自分には価値があると相手が認めてくれるのか確かめたい。	4.49	1.56
願望	4 相手が自分を大事にしてくれているのを知りたい。	5.01	1.58
願望	5 自分を気にかけていて欲しい。	5.60	1.27
願望	6 相手から避けられているのかどうかは気にならない。(※)	5.49	1.42
行動	7 相手が自分を受け入れてくれるのか確かめたとしても、また気になってしまう。	4.44	1.59
行動	8 自分のよいところを相手が認めていると確かめたら、また確かめたりはしない。(※)	3.90	1.57
行動	9 自分を好きかどうか確かめても、さらに相手にたずねたり、あるいは相手を試すようなことをする。	3.63	1.74
行動	10 自分を気づかせてくれたとしても、自分のことを心から思っただろうかといつまでも考えてしまう。	4.25	1.73
行動	11 自分を気にかけてくれているのか気になって、相手の言動についてあれこれ考えてしまう。	5.22	1.57
行動	12 自分をいたわってほしくて、悩みをうち明けたり、あるいは弱音を吐いたりするようなことがたびたびある。	4.28	1.68
		平均値 56.28	
		標準偏差 11.66	

注. 得点範囲は12~84。(※)は逆転項目であり、表には変換処理後の数値を示している。項目の頭にあるラベルは、どの側面を測定しているかを示している。

果、再確認傾向尺度は抑うつと正の相関 ($r(122)=.37, p<.0001$)、自尊心と負の相関 ($r(120)=-.33, p<.001$) となり、それぞれ予測と一致する方向の相関がみられた。また、再確認行動の結果と正の相関 ($r(123)=.48, p<.0001$)、4項目尺度と正の相関 ($r(120)=.47, p<.0001$) がみられたことから、再確認傾向尺度に対する収束的

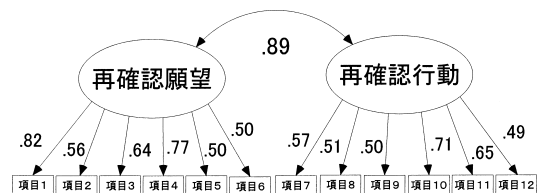


Figure 1 確認的因子分析の結果

証拠となる結果が得られた。なお、尺度全体でも下位尺度別でも性差はみられなかった（尺度全体： $t(120)=-1.27, n.s.$ ；再確認願望： $t(120)=-1.57, n.s.$ ；再確認行動： $t(120)=-0.81, n.s.$ ）。

研究 2

目 的

研究 2 では、他のサンプルを用いて再確認傾向尺度の妥当性をさらに検討した。具体的には、研究 1 ではとりあげなかった構成概念で、再確認傾向との関連が予想される特性不安、他者からの評価の知覚、拒否回避欲求との関係を検討した。研究 1 で、再確認傾向は自尊心と負の相関、抑うつと正の相関があったことから、特性不安や拒否回避欲求と正の相関、他者からの評価の知覚と負の相関が予測できる。

さらに、再確認傾向に時間的安定性があるかも検討した。再確認傾向とは重要他者に対する動機づけと行動のパターンであるが、その人が現在おかれている対人関係の構造が比較的安定していれば、ある程度時間的に安定して保たれると考える。

方 法

調査協力者 T 大学の学生 397 名（男性 273 名、女性 124 名；平均年齢 19.20 歳）。

手続き 集団による質問紙調査を講義中に行った。用いた尺度は、①再確認傾向尺度、②自己評価抑うつ尺度（SDS）、③日本語版ローゼンバーグ自尊心尺度、④特性不安尺度（Trait scale of STAI；清水・今栄，1981）、⑤他者からの評価の知覚：10 項目のローゼンバーグ自尊心尺度で、（ポジティブ重要他者に相当する）親しい友人が自分をどのように見ているかを評定させるもの、⑥拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原，2003）であった。2001 年 10 月に 165 名を対象に①～⑥の尺度を実施し、2002 年 4 月に 232 名を対象に④以外の尺度を実施した。これらのデータを合わせたため、④のみデータ数が他の尺度よりも少なくなっている⁶⁾。また、再検査信頼性の検討のため、

2001 年 10 月に実施した調査の 2 ヶ月後の 12 月に再確認傾向尺度を同じ講義中に再度実施した。この際の対象は 113 名（男性 80 名、女性 33 名）であった。

結果と考察

因子妥当性・他の構成概念との関連の検討 再確認傾向尺度の 12 項目に対して再度確認的因子分析を行った。その結果、研究 1 と同様 2 因子モデルが 1 因子モデルより適合度指標の値が高かった（Table 1）。また、再確認傾向尺度の合計得点（ $M=54.30, SD=13.61$ ）と個人差変数の相関係数を求めたところ、抑うつ、拒否回避欲求、特性不安とは正の相関（抑うつ： $r(394)=.20, p<.0001$ ；拒否回避欲求： $r(397)=.44, p<.0001$ ；特性不安： $r(163)=.34, p<.0001$ ）、自尊心、他者からの評価の知覚とは負の相関がみられた（自尊心： $r(397)=-.22, p<.0001$ ；他者からの評価の知覚： $r(394)=-.15, p<.01$ ）。

従って、再確認傾向尺度は他のサンプルを用いても研究 1 と同様の確認的因子分析の結果が得られた。特性不安、拒否回避欲求、他者からの評価の知覚とも予測と一致する相関がみられたので、因子妥当性を支持し、収束的証拠となる結果が得られた。

再検査信頼性の検討 再確認傾向尺度の再検査信頼性を検討するため、2001 年 10 月と 2001 年 12 月に回答を得た再確認傾向尺度の得点間で相関係数を算出した。その結果、相関係数が .79 となり、本尺度は再検査信頼性が高いことが示された。

性差の検討 尺度全体でも下位尺度別でも有意な性差がみられ（尺度全体： $t(395)=-2.42, p<.05$ ；再確認願望： $t(395)=-2.39, p<.05$ ；再確認行動： $t(395)=-2.01, p<.05$ ）、いずれも女性

6) ここでの重要他者は、ポジティブ重要他者だけに限定されている。再確認傾向尺度以外の尺度は、他の複数の調査にも使用する目的で質問紙に含めていたためである。今後は、ポジティブ・ネガティブ重要他者の両方について尋ねて比較する必要がある。

が男性よりも尺度得点が高いことが示された。

総合考察

本研究では、再確認傾向尺度を作成して信頼性と妥当性を検討した。研究1では再確認傾向尺度は信頼性係数が高く、尺度は再確認願望、再確認行動という2因子から構成されるモデルが最もあてはまりがよいこと、抑うつや自尊心と関連していること、得点分布が正規分布に近いことが示された。

研究2では、他のサンプルを用いても尺度の因子構造に同様の結果がみられること、特性不安、拒否回避欲求、他者からの評価の知覚と関連していること、再検査信頼性が比較的高いことが示された。これらの結果から、再確認傾向尺度は、通常の日常生活を営める程度に精神的に健康である青年期から成人期の者を対象に再確認傾向を測定するのに有効な尺度であると考えられる。

確認的因子分析の結果から、本尺度では再確認傾向の概念的定義に対応した2因子モデルを採用した。ただし、因子間相関が非常に高く、1因子モデルの適合度指標の値も2因子モデルにくらべてわずかながら低い程度であった。再確認傾向の概念的定義では、再確認願望と再確認行動のどちらも不可欠な要素であり、これらは直行する2つの独立した概念というよりは互いに関連した概念とみなす方が適切であろう。確認的因子分析の結果からも2つの因子間相関が高いことが示されているので、個人差変数としての再確認傾向の影響を検討するには基本的には尺度全体の合計点を用いた分析が必要である。ただし、研究1のデータでは下位尺度ごとの信頼性係数も低くはなく、再検査信頼性の値も高いので（再確認願望：.783、再確認行動：.709）、下位尺度別の使用も可能である。今後は、再確認願望が活性化する状況や、再確認願望が活性化してなされた再確認行動が精神的健康に影響するプロセスの検討にくわえ、再確認願望と再確認行動のそれぞれが精神的健康に

及ぼす影響が異なるかの検討が必要である。

また、再確認傾向尺度の得点に性差がみられる場合があった。研究1では性差がみられなかったが、研究2では女性が男性よりも再確認傾向が高いことが示された。こうした結果は、女性は男性よりも対人志向性（e.g., Beck, 1983）が高いためとも解釈しうる。しかし、両研究ではサンプルが異なるため、このような結果が男女で何らかの傾向が異なるためか、サンプル特有の問題によるものか本研究のデータからは不明確である。今後は、どのような場合に性差がみられるかの検討が必要であろう。

今後は、再確認傾向がどのような不適応的な対人行動につながるのかを検討する必要がある。たとえば、重要他者との間でネガティブなライフイベントを経験した時の対処行動や、抑うつから立ち直るための行動への影響の検討などがある。再確認傾向が精神的健康に及ぼす影響について、時系列データを用いて因果関係までふみこんで検討する必要もある。このように、再確認傾向にもとづいた重要他者との相互作用が、精神的健康にどのような影響を及ぼすのかを実証的に検討することが望まれる。

引用文献

- Beck, A. T. 1983 Cognitive therapy of depression: New perspectives. In P. Clayton, & J. E. Barrett (Eds.), *Treatment of depression: Old controversies and new approaches*. New York: Raven Press. Pp. 265-290.
- Benazon, N. R., & Coyne, J. C. 1999 The next step in developing an interactional description of depression? *Psychological Inquiry*, **10**, 279-282.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss Vol. 3. Loss: sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Chen, S., & Andersen, S. M. 1999 Relationships from the past in the present: Significant-other representations and transference in interpersonal life. In Zanna, M. P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 31. San Diego: Academic Press. Pp. 123-190.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育（2）児童心理, **24**, 1445-1477.

- Hasegawa, K., & Ura, M. 2001 Reflected self-appraisal from an intimate as a function of self-esteem and reassurance seeking. Poster presented at 4th conference of the Asian Association of Social Psychology, Melbourne, Australia.
- 長谷川孝治・浦 光博・前田和寛 2001 他者からの拒絶認知が抑うつ傾向に及ぼす影響過程についての検討—安心さがし行動の仲介効果と関係性の調整効果 日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集, 92-93.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Joiner, T. E., Jr. 1994 Contagious depression: Existence, specificity to depressed symptoms, and the role of reassurance seeking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 287-296.
- Joiner, T. E., Jr., Alfano, M. S., & Metalsky, G. I. 1992 When depression breeds contempt: Reassurance seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 165-173.
- Joiner, T. E., Jr., & Coyne, J. C. (Eds.). 1999 *The interactional nature of depression: Advances in interpersonal approaches*. Washington DC: American Psychological Association.
- Joiner, T. E., Jr., Katz, J., & Lew, A. 1999 Harbingers of depressotypic reassurance seeking: Negative life events, increased anxiety, and decreased self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 630-637.
- Joiner, T. E., Jr., & Metalsky, G. I. 2001 Excessive reassurance seeking: Delineating a risk factor involved in the development of depressive symptoms. *Psychological Science*, **12**, 371-378.
- Joiner, T. E., Jr., Metalsky, G. I., Katz, J., & Beach, S. R. H. 1999 Depression and excessive reassurance-seeking. *Psychological Inquiry*, **10**, 269-278.
- Joiner, T. E., Jr., & Schmidt, N. B. 1998 Excessive reassurance-seeking predicts depressive but not anxious reactions to acute stress. *Journal of Abnormal Psychology*, **107**, 533-537.
- Jones, E. E., & Pittman, T. S. 1982 Toward a general theory of strategic self-presentation. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 1 Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 231-262.
- 勝谷紀子 2001 確認を求める傾向尺度の信頼性・妥当性の検討 性格心理学研究, **10**, 62-63.
- Katz, J., Beach, S. R. H., & Joiner, T. E., Jr. 1998 When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal Relationships*, **5**, 409-421.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, **29**, 62-67.
- Swann, W. B., Jr., Wenzlaff, R. M., Krull, D. S., & Pelham, B. W. 1992 Allure of negative feedback: Self-verification strivings among depressed persons. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 293-306.

— 2003. 9. 9 受稿, 2004. 2. 25 受理—

Reliability and Validity of Japanese Revised Version of Reassurance-seeking Scale

Noriko KATSUYA

Tokyo Metropolitan University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2004, Vol. 13 No. 1, 11-20

This study investigated the reliability and validity of Japanese revised version of 12 item reassurance-seeking scale. In study 1, 123 undergraduates were asked to complete a questionnaire that included the reassurance-seeking scale, a depression scale, and self-esteem scale. Results showed that reassurance-seeking scale had 2 factors: reassurance-seeking from significant others and interpersonal/cognitive/behavioral factor to seek reassurance. Also the scale had a positive correlation with depression and a negative correlation with self-esteem. In study 2, 397 students participated in a questionnaire study to investigate correlational validity and test-retest reliability of the scale. Results indicated that it again consisted of 2 factors, and that reassurance-seeking correlated with trait-anxiety, need for rejection avoidance, and evaluations by close friends. Implications for future studies of the effects of reassurance-seeking on mental health were discussed.

Key words: reassurance-seeking, reliability, validity, depression, self-esteem